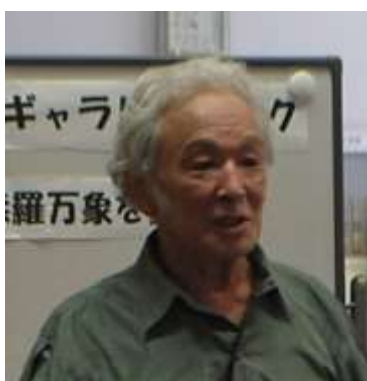


## 乗田貞勝展～バリの森羅万象を描く～ ギャラリートーク

平成 26 年 8 月 30 日(土)

エイブル2階交流プラザ



今日はお忙しい中、お集まりいただき嬉しく思っています。ギャラリートークに一人でも来ていただければ最後まで話そうと思ひ、今日は新しい作品を 12 点用意しました。これらの作品はほんの一部です。家には 4～5 メートルの作品が沢山ありますが、それを全て運ぶにはトラックが必要になるので止めました（笑）。

僕は、生まれは（鹿島の）浜町で、それから古枝に移ったのですが、小さい頃は自然児でした。古枝を流れている浜川、その上流に祐徳稲荷神社があり、そして小淵（川の急な深み）があり、下流には薬師橋があり、そして有明海が存在しています。そのような環境の中で、あまり勉強は好きではなかったので、毎日が山学校、川学校でした。有明海に行き、むつごろう、ワラスボを捕り、籠に入れて家に持って帰れば母親に、『お前は勉強はせずに、こんなことばかりして』と説教され、その籠を前の畑に投げつけられていました。

今思えば、そのような生活を送っていたからこそ、その時の思いが、この「赤い道」に繋がっていったのだと思います。この絵はバリと浜の小道とが繋がっているのです。豊穰なる海の有明海、信仰ある祐徳稲荷神社、浜周辺の農業の風景。あの頃農業をしていた場所に小さな小道があり、そこを歩いて久保山に行ったりしていました。面白いもので人間というのは、豊穰の海の有明海、そして、浜と一緒に田植えの手伝いをしていた母との想い、そういったものが、一つの印象として繋がっているんですね。



「赤い道」

僕は、32 歳で学校の教師をやめ、プロの画家を目指して新たな出発をしました。学校の同僚の良き友 K 氏の精神的な支えは、真理を求め行くのに大変力強かったことを覚えています。

バリ島に行った最初の頃は、飛行場から近い、夕日のきれいな海辺で絵を描いていました。バリ島は田舎だけど、オーストラリアやカナダなどの外国人の観光客が多いところです。僕は、有名にならないと絵が売れないと思ひ、とにかく自分を痛めつけたら神が何かを与えてくれると信じ、炎天下の中 9 時間ぐらい必死になって描いたりしていました。

そんな状況で描いていると、外国人観光客が寝そべったりしてモデルになってくれるんですよ。でも、それが外国人のベッドのように思えて、だんだん嫌になってきたんです。それで、本当のバリの素朴で

神秘的な姿は山にあるのではないかと思い、山で絵を描くようになったのです。山で、危害を加えられないように髭もたくわえ強そうに見える風貌で、眉間に皺を寄せながら絵を描いていました。

ところが、ここで働いている農夫たちが、頭には水を抱えていたり、鎌を腰に差したり、鍬を肩にかけて、行ったり来たりしているんですよ。そして、彼らは僕を見て、ニコッと微笑みかけてくるのです。その顔の表情が何とも言えないんです。この人達は何の欲も無いのではと思えるのです。それにひきかえ僕は、有名になりたい、展覧会にあがらないと絵は売れないとか、そんな欲深いことばかり考えているのです。

彼らが歩いてくる肩幅の道が、ひとつの生活の道であり、生命力の道であり、人生の道であるわけです。それを見た瞬間に、僕は人間が生きようとする血管と同じではないかと思えたのです。僕らは意識して赤い血を持っているわけではないでしょう。ずっと昔から流れる血ですよ。そしてこの血が、子供を授かったりすると、白い母乳に変化したりするんですよ。そういったものが一遍に堰を切ったように流れ込んできたのです。

人間の心の中には3つの色があって、他人のために何か役立ちたいという白い色、一生懸命生きたいという赤い色、時々<sup>よこしま</sup> 邪なことを考えたりする黒い色、3つの色が絡んで時々によって表面に出てくるのではないかと。そんなことを考えるようになりました。

東大で哲学を学んだ知人に、バリで感じた三つの色のことについて尋ねたら、インド哲学書の最初にそのことが書かれているということを見せてもらい、驚きました。突き詰めると人間の命は自然界から与えられていると考えるようになり、それから魅せられていったのです。

昔から、母なる大地といいますが、母親というのは大地の母のごとく、子孫を永遠に産み続けています。だから、我々の命というのは今まで存在してきたんです。バリ島では1年に3回の稲作ができます。



「耕到天」

こちらで田植えをしているかと思えば、もう一方では稲刈りしている。その風景模様が実に面白い。この、刈っては、また生み出す力。この大地の持つエネルギーはすごいと思いました。

ところが、大地だけで成り立っているわけではない。太陽があり、月があり、雲ができ、波は動き、海は干満により浄化されていくわけです。“浄化”という意味について10年ほど考え続けました。人間が汚物などを出して生活を続けているのに、何故、綺麗な環境で生きていけるのか？ そんなことを考え続け

ていると、太陽と月、地球の間で奇跡的な繰り返しをしながら、緑の草木、塩水、微生物などの浄化の動きが分かってくるのです。

そうすると、絵を通して真理の世界に入り込むことが楽しくなるわけです。毎日日記を書くのと同じように、自然の表情を折り込んだ絵を描くのが楽しくなるのです。バリ島では、人間の生活と自然の調和が大変うまくとれていると思います。

バリ島には、自然以外には何もないので、絵を描くしかないですね(笑)。標高 750 メートルぐらいの山で、朝早くから朝陽を描いていると、天気の良い日に、東から西の山に太陽の光が当たり、神の機嫌がいいと感じる風景があるんです。小鳥が鳴いてきます。小鳥は朝陽の出る 40 分前からさえずり始めます。自然の中で生活していると、自然が教えてくれます。小鳥は脳天で光を感じていると教えてくれる人がいました。我々人間も、元々はそういう第六感が働いていたと思うのですが、便利な生活の中で、そういうものを失ってきたんですね。

そういうことを自然界から学んでいるうちに、生かされているものはすべて描かなければいけないと思うようになりました。そして、ある時から、朝陽を毎日のように描き、朝食を終えたら昼間は、農業をする人々、海辺で漁をする人々を描き、夕方には夕陽を描く。そして、満月の綺麗な日は満月を描き、星空の綺麗な日は星空を描く。バリ島での 2 ヶ月弱の滞在期間中、このような毎日続けることを決意するわけです。

そのような生活を続けていると、滞在の最後のあたりでは、風呂に入ったまま寝てしまうような状態になるんですよ。しかし、そんなとき、「地球はこんな風にして宇宙に浮いているのではないか」というような感覚を感じることができるようになるのです。

バリ島は気温が高く、外に干すと油絵の乾きが意外と早いのです。ですから、私もよく屋根の上において乾かします。夜になると夜鷹が飛んできたりします。羽根には白い線があり、すごく綺麗ですね。

干している絵のところに寄ってきた鷹を無想の心境になって観察したりします。観光客が来たときに踊りを見せる女性たちは、自然界で生きてきた振付師で、言葉は使わず、動きや目の動きだけの視覚言語で鳥を表現するのがすごく上手です。



赤道直下の 15 度付近では、午後 7 時 10 分頃から満月は登り始めます。真っ赤です。夜の太陽です。それを見ると震えますよ、身体が。満月が水平線から離れる瞬間、ミミズのような赤い血が流れたように、水面にビュッと筋が入るのです。その後にバツバツバツと線が入ります。それを月の階段といいます。

そのとき、教員時代に教えたことのある、月光菩薩、日光菩薩、<sup>ふくろうけんじやくかんのん</sup>不空縹索観音像のことが頭をよぎりました。バリ島から帰国したら直ぐに奈良の東大寺横にある三月堂に駆け込みました。右に日光菩薩、左に月光菩薩が並んでおり、真ん中に不空縹索観音像が配置され、ガンダーラ仏を彷彿させる仏像ですが、やっぱり綺麗で荘厳で慈悲深く、手を合わせました。

日光・月光菩薩像の高さは同じです。大きい太陽が遠くにあり、月は近くにあるから、人間の視覚では同じに見えます。だから、地球は壊れずにそこに在しているのです。奇跡です。それを昔の人々は、太陽と月があり、地球があり、そして我々が生きているということを仏像の形で表しています。今では、

般若心経などにその教えを求めますが、昔はちゃんと教えがあったのでしょね。

日本に帰ってから、このことが分かったと嬉しくてたまらなかったです。一日一生を続けてきたからこそ、このようなことを与えられたのだと思います。

赤道直下の15度付近では、太陽の昇るところと月の昇るところが同じです。日本では違いますよね。与謝蕪村が「月は東に日は西に」と言うじゃないですか。すごいなあと思いますね。蕪村や山頭火は自然観察をものすごくしていたからこそ、心を打つ、すばらしい句ができたのです。自然に対する精神性が言葉になった時には一緒になるのですね。自然観察に基づく本当の句は真理をついているのです。森羅万象は教えてくれるわけです、宇宙に存在するすべてのものは繋がっているということ。

そうすると、バリ島だけを描いてはいけないと思うのです。地球には山があり、冷たいところがあり、暖かいところもあり、平たん部もある。すべてが一緒になって地球は成り立っていると。



それでヒマラヤに行くわけです。それ以前にはモンゴルにも行き、スリランカも旅しました。ヒマラヤ、パキスタンに連なる山々は7000メートル級の山ばかりです。そこを描くには、2500メートルから3000メートル付近まで歩いて登って行かなければならない。着ている服を脱ぎ棄てたくなるほど、きつい思いをしながら。この絵は、そういう所へ行って描かせてもらいました。ここでは、光は下から照らしますので、一番高い山の

山頂に光が当たります。また、奥の方の見えない所の山頂に光が当たり、高い山が隠れているのが分かり、山々の高さが分かるのです。一番高い山の山頂に光が当たると、星のように光ります。そして、太陽が昇るにつれ、光が滝のように下に流れていくように見えるのです。造形は二の次ですよ！ こういう自然界に行くと、自然が教えるままに学んでいけばいいのです。いい絵はすべて現場主義です。現場で描いているから強さがあり、嘘はないのです。

この絵は、バリ島のクタの夕日です。世界の三大夕日と言われています。

僕は最初、朝陽ではなく夕陽から描き始めました。夕陽が沈むのが速すぎて、うまく描けないのですよ。それまでは、赤い道は生命力、黒い道は悪の世界とか、そういう風に決めつけていたのです。そして、白い道だけは分からなかったですね。白い道を描いてもしっくりきません。何だろう？ と。

うまく描けない夕陽の絵を、毎日毎日描きに行きました。朝早く朝陽を描いて、昼間は働く人を描き、その後「一日あり



「祈り」

がとう」という感謝の気持ちを持って、クタビーチに描きに行っていました。うまく描けず、四枚も五枚も失敗ばかりしてしていました。そうしているうち、ある日、そこに行ってみると、天が金色になって、砂が水を含んで、天が地に映っているんです、鏡のように。これだったら横に線を引っ張って、「これならば描けるぞ」って思えたんです。そして、50号の横長の絵を40、50分で描き上げたら、誰もが「いい！」と言うんです。でも僕は、日本に帰ってからも、描いてきた夕陽の絵が良いのか悪いのか分からないまま置いていました。

すると、友人の知り合いのお坊さんを家に泊めたとき、そのお坊さんが夕陽の絵を睨みつけていたんです。そして、この絵には何という題名をつけるのかと言うので、夕陽の絵なので「夕陽」かなあという、<sup>ひゃくどう</sup>「白道」と名付けたらどうかと言うんです。

仏教用語で二河白道<sup>にがひゃくどう</sup>といって、南の火の川（怒り）と、北の水の川（貪る心）があり、その間に一筋の白い道が通っているが、一心に白い道を突き進むと、終には浄土に辿り着けるといわれている。半信半疑で、夕陽に括弧書きで「ひゃくどう」と名付けたのですが、岩田屋のギャラリーに出した時、観に来たお客さんが、その絵に手を合わせるのですよ。自分の絵に手を合わせてくれる姿に、気恥ずかしさを覚えたものです。

その後、岩田屋の近くにあるお寺に行った時のことですが、本堂が全部、金色に見えたのです。目の錯覚かと思ったのですが、その住職に「お寺は“夕陽”じゃないですか？」と尋ねると、「そうだ」と答えられるのです。「目の高さにあるのが阿弥陀さんで、西方浄土<sup>かたど</sup>を模ったのがこのお寺ですよ」と言われたのに驚きました。

そして有明海でも、そうなる時があるそうです。此处のとは少し違うとは思いますが、満月の日とか、新月の時に現れます。その時には、波が3拍子でやってきます。自然の摂理というのは、そういう風になっているんです。1. 2. 3 1. 2. 3 と、静かに、やさしく、やってくるんです。自然界は、すべてがそういうふうに、命の真理が何にでも流れているんです。そういうことを学ばんが為に絵を描きに行ったんじゃないかと思います。やはり、感謝するしかないですね。



この「赤い道」にもどりますが、バリ島ではスイレンは、毎日寺院にお供えするんです。彼らにとっては、お祈りの道具なので、見かけた時、すぐに描いておかないと摘まれてしまいます。「赤い道」の絵は、働きと祈り、そして感謝があります。この赤い道は働きと感謝が一緒になった絵です。

この絵の真ん中の道は、昔、久保山に通った道なんです。先祖代々から歩いてきて、田植えをして、刈り入れをしていた道です。昔はこの肩幅の小道の中に、生活の営みがあったのです。そして、米がたくさん穫れるように、仏壇に花をあげたりしてきました。そういうことの繰り返し、ずっと繋がってきたのです。だから、この赤い道は、母親のヘソの緒でもあるのです。そして、何千年、何万年も命の道が繋がってきて、皆の命が存在しているのです。そんなことを、この時は本気で感じました。オリンピック選手が優勝して、大地に接吻するシーンのような感覚です。

この「赤い道」を制作したときに書いた文章を読んでもみます。

「今、自然の大地を、草の上を裸足で歩き、自分を信じ、足の裏で考える。それが道の発見の一步である。色は光ではない。光は色そのものであり、光は命である。普遍に満ちた一本の道は、自然と私達を繋ぐヘソの緒。古代から、先祖から、父、母から続いている、見えないけれど確かにある道。少年の頃、いつしか歩いた空へ繋がる白い道。何千年も、何万年も続いてきた道。太陽に、月に、星に、水に、草木に、自然の摂理の力強い命の道がある。人間もその中に組み込まれた道がある。その命の道を知った瞬間、大いなる慈悲に感謝の念でいっぱいになり、目に涙して、大地に跪き、接吻するでしょう。」

そういうふうにして、段々感謝の念を表現せざるを得なくなるのです。

バリ島に行くようになって 10 年ぐらい経った時に、何のために絵を描くのか？ と。そこが分からなければ、絵を描く意味がない、と思ったのです。テッサンとか構図の上手さだけではないと。それで、世界の各地に絵の原点になるものを見て歩きました。

フランスの牛や馬を描いたラスコーの壁画や、スペインのアルタミラ洞窟の壁画、アメリカのネイティブインディアンのホピ族やナバホ族の遺跡も見に行きました。何万年も前の星とか月が描かれた壁画が残っています。

また、バリ島から 1000 キロ離れたレンバダ島やフロレス島にも行きました。これらの島は、何も無い、星だけがキラリと光っている綺麗な場所。人のいない、汚れていない空間というのはピンク色、さくら色なんです。手つかずの島というのは、ゴーギャンの絵に使ってある色。あれは、自ずと必然的にああいう色なんです。それが人々の営みで、段々と純潔なものが汚れていくんです。そのような環境の中、すごい生き方をしている人はいっぱいいますよ。

何の為にあなたは織物をしますか？ 絵を描くのと同じです、形を表すというのは。アルタミラ洞窟の馬や牛の壁画と同様、ここに展示しているバリ島の織物にはクジラと舟が織り込んであります。クジラがいなかったら生きていけないわけで、感謝の表れがこれだったんです。ただ綺麗に描くとか面白く描くなんてことではない。これが彼らの原点なんです。

バリ島は、4 月まで雨季で、雨季明けの満月の時に、神を迎える祭りがあります。満月の昇る 1 時間前からガムラン音楽で始まり、満月が真上に来たときに頂点を迎えます。そして、月が地球を 1 周した次の日の 7 時から、神様を送るためにガムラン音楽を奏でます。

その時、僕は一人、海岸にすわり絵を描きます。真っ暗な中で懐中電灯をつけながら一人ぼっちで描きます。孤独でなければ、いい絵は描けないですね。祭りは 1 時間ほどで終わりますが、ちょうどその頃絵も描き終わったりします。

#### 【質疑応答】

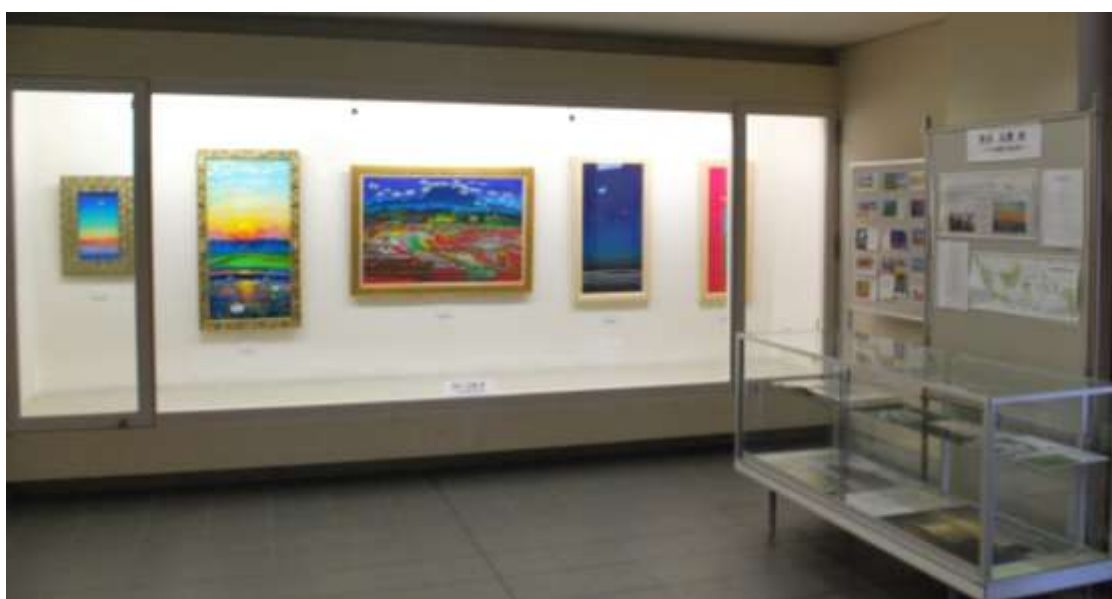
○創作意欲はどこから？

現場に行くと描かざるを得ないのですよ。やはり、人間は一人ぼっちだからかもしれない、寂しいからかもしれない。描いているうちに真理を追究していくんです。そうすると、描いた後からでしか言葉が出てこないんです。実践した後に、生まれてくるものがあります。

○何のために絵を描くのか？

神に近づくためです。大いなる自然の営みに近づくことです。そういう思想が背景になれば、絵を描く意味がない。森羅万象は、我々が生死を繰り返すのと同じように、常に諸行無常に向いています。朝陽にしても、同じものは1回もないですよ。田園風景にしても。一期一会と言いますね。深い意味があるのです。二度と同じ風景は現れません。また行っても同じ風景はありません。

あの花摘みの絵の中の、寺院に備えるため、朝から晩まで花を摘む人が、私が絵を描いていると、「飯を食べてもいいか？」と聞くのです。見ず知らずの私にですよ。「どうぞ、どうぞ」と言うと、大地にコメを2、3粒まいて、そして水を振り掛けてから、ご飯を食べるのです。自然に育まれながら謙遜に生きる生き方は、こちら真面目にならざるを得ないですよ。縁の下の力持ち的な、名もなき人達こそが、僕達を頑張らせてくれているのです。



前期展示



後期展示